

宴のあとに

——オリンピックを問う

牛村 圭

同じ名とは言いながら

「君の名は。」という映画が人気だという。タイトル名を耳にしたとき、聞き覚えのある響きと感じた。竹山道雄の名作『ビルマの竖琴』が二度映画となり、その都度人気を博したという先例を思い起こし、なにかの旧作のリメイク版かな、と考えた。その旧作を思い出せないままであったある日の夕刻、新幹線で乗り合わせた京都観光からの帰路と思しき初老のご婦人方四名の会話が、謎を解いてくれた——『君の名は』つて言うけど、真知子じゃないのよね——」。そう、真知子だ、と合点した。とはいっても私は同時進行でこの「君の名は」に接した世代ではない。にもかかわらずわが脳裏にあるということは、「君の名は」がそれだけ昭和史に大きな刻印を残した出来事だったことの証左なのだろう。検索の労を厭わず調べてみると、一

九五二―五四年に放送されたNHKのラジオドラマと判明した。初回放送日は五二年四月一〇日というから、GHQによる占領解除（四月二八日）直前、つまり独立回復前にすでに始まっていたことになる。そののち、映画にもなり、岸恵子、佐田啓二の主演で大変な好評を博したという（一九九一年四月―九二年三月にはNHKの朝の連続テレビ小説にもなっていたらしいが、当時滞米中だったため、記憶にはない）。

同じ名ながらも、実体はまったく異なるという例は他にも多々ある。人の場合は、同姓同名というケース。大学の教室で担当した学生に、昭和四十年代の東大総長の名を見つけ一驚したことがある。ものの場合も、同じ名称を冠しながら、その中味は昔日のそれとはまったく異なるというものが多数ある。たとえば「電話」と呼ばれながらも、ポータブルコンピュータに通話機能がついている、というのが昨今の携帯電話やスマートフォンの実情だろう。「ダイヤル回しながら、『好き』とつぶやいてる」というのが竹内まりやの一曲（「色・ホワイトブレンド」）の歌詞を目の前にすると、二十世紀の若者たちはダイヤルを回しているという光景を想像するのが難かろう。そういう世代には、写真を撮った直後に写り具合を確かめるのが当たり前で、フィルムを現像に出し数日後に戻ってきて初めて写真を確認し、必要があれば「焼き増し」を店に依頼するというプロセスもなかなか理解しがたいことだろう。

さて、南米大陸初の開催となったリオデジャネイロ五輪が閉幕して、すでに一か月以上を経た。今回は東京で五十六年ぶり二度目の開催となるためか、国内は四年後に向けての話題——希望も心配も——で既に溢れている観がある。リオ五輪はもはや過ぎ去りし一齣であり、紙誌に記録集計や総評を委ねれば良いかの如くにさえ感じられる。次期主催国としての責務を果たすためには、前を向いて進むことは必要だろう。三百万票に垂んとする支持を得て就任した新都知事は、その先頭に立っている。だが、同じ「オリンピック」と

いう名を冠しながらも、昔日の五輪とはすっかり姿を変えてしまった観があるオリンピッククを、一度問うてみてから歩むこともまた肝要ではないか。以下に、そのささやかな試みを綴ってみた。

「五輪に集う高収入アスリート一〇傑」

リオ五輪の開会式直後の八月六日、『朝日新聞』に興味深い記事が掲載された。「億万長者アスリートは？ 錦織が五位 リオ五輪」と題されたその記事には、「リオデジヤネイロ五輪に集う高収入のアスリート一〇傑」のリードのもと、その十人の名と推定年収（米ドル）を掲げた一覧表があった。一位はNBA（アメリカプロバスケットボール）のデュラント、二位はテニスのジョコビッチ、三位をテニスのナダルとサッカーのネイマールで分け合い、そして五位に錦織圭。六位には陸上競技のボルトの名があった。八位に唯一女性のテニス選手セリーナ・ウィリアムズが入り、七、九、一〇位はいずれもNBAのプレーヤーが占めた。

「オリンピックに集う高収入アスリートたち」というこの一覧表を見て隔世の感をおぼえたのは私一人ではないだろう。十人中九名がプロ選手であること、つまり、プロのアスリートが堂々とオリンピックに出場できる世であること、そして、プロ競技団体を持たない陸上競技の競技者であるウサイン・ボルトがプロ選手と収入面で渡り合っていること等々、昭和の時代の五輪を知る者ならば、思いもよらないことばかりである。ボルトの場合は、広告収入や参加レースからの報奨金が収入源になっている。プロアマ問わずスポーツに長じれば——と言っても、世界トップレベルという類い希な才能という話だが——かなりの競技種目ではビリオネアに成れるというのが二十一世紀なのである。

もう一点、やや古い内容となるが引いておきたい報道がある。リオ五輪でメダル獲得を確実視されながらも、カジノ賭博への関わりが判明したため五輪への道を断られた若手のバドミントン競技者がいた。「子どもたちに（テニスではなくバドミントンでも食っていけるという）夢を見せたい」として派手なファッションや高価なアクセサリを身につけていたことも、あらためて報じられた。「テニスではなく」と前提したとき、二十一歳というこの競技者の念頭にあったのは、錦織だったのか。そして、錦織のようにジャガーの新車の提供は受けられないにしても、「派手なファッションや高価なアクセサリ」に、自らは高収入を得ているというメッセージを託したかったのか。

テニスと違ってバドミントンにはプロ団体はない。すなわち、テニスプレーヤーがテニスで収入を得ているのと、バドミントン選手が「食っていける」というのは、そもそも前提が異なるはずなのに、この若いプレーヤーにはそれが見えなかったのか。彼は真つ当な実業団所属選手である。一企業の人間として夕方まで（ときには配慮を受けて午後の早い時間まで）仕事をこなしそののち体育館で練習に励む、というのが実業団選手の通例だった。勤務で得られる収入は、若手社員のそれに他ならず、額はたかがしれていた。いまでも実業団所属の選手が勤務から得られる給与は、栄養費などの特例を除けば同世代の同僚とさほど変わることはないだろう。にもかかわらず、派手な生活がおくっていたのは報奨金等の多額の別収入があったことの証しだった。実績があれば、日本選手であっても、プロ団体がなくとも、昔日の実業団所属選手には思いもよらない「厚遇」を受けられることを世間一般があらためて知る契機となった一件でもあった。

「オリンピックアマチュア競技者の祭典」は過去のこと

アマチュアを続けて五輪を目指すか、それともプロに転じ、五輪を断念する代わりに自らの技能をもって

糧道とするか、という二者択一の葛藤はもはや過去のこととなった。オリンピックに関しては、アマチュアリズムは消失したのである。プロアマ問わず、もつとも強い者が出場し競い合う場が、オリンピックという四年に一度のスポーツの祭典である——これこそ、現下のオリンピックを形容するに相応しい定義だろう。シカゴ・ブルズ所属のマイケル・ジョーダンを筆頭とするNBAのスーパースターたちから成る「ドリムチーム」と呼ばれたチームでアメリカがオリンピックに臨んだのは、一九九二年の第二十五回バルセロナ大会のことである。それからすでに四半世紀ほどを閲する。バスケットボールという同一競技種目にアマチュアとプロとが併存し、オリンピックへ出られるのはアマチュアの強者たち、という当たり前とされてきた前提が撤廃され、最も優れたプレーヤーたちがチームを編成して五輪に参加したというこの史実は、アマチュアリズムの消失の象徴的な出来事として、近代オリンピック史に向後も大きく記載され続けていくことになるう。

顧みれば、オリンピックに参加できるのはアマチュアに限る、という一項が「オリンピック参加規定」に加えられたのは、一九〇八年の第四回ロンドン大会の時だった。近代オリンピックの祖であり初代IOC会長を務めたピエール・ドゥ・クーベルタンは、アマチュア資格に厳格だったと伝えられているが、近代オリンピック開始当初、IOC全体としては、参加資格について厳しくはなかったことが分かるう。ちなみに、オリンピックへの参加方法も、セントルイスで開催された第三回大会までは、参加競技者が個人またはチームとしてIOCに申し込むかたちがとられた。今では当たり前の、所属国の国内オリンピック委員会（NOC）を通しての参加という形式もまた、第四回ロンドン大会に始まった。

ジム・ソープ事件を顧みる

日本が初参加した一九一二年の第五回ストックホルム大会ののち、おそらくオリンピック史上最大のプロ／アマをめぐるスキャンダルが起こった。同大会では、陸上競技男子の混成競技（五種競技と十種競技、当時はこの二種があった）を、アメリカのジム・ソープが圧倒的な強さを示して制した。主催国スウェーデンの国王ばかりかロシア皇帝からもその榮譽を讃えられた。だが、翌年一月になり、ソープが自国のマイナーリーグで野球選手として報酬を得ていた過去が新聞にスクープされた。全米運動協会（AAU）はソープの擁護にまわるのではなく、これを問題視し、最終的にIOCはソープが得た二つの金メダルを剥奪する決定を下したのである。些額であってもスポーツ競技で報酬を得ていたという過去の事実（当初は、体育教師すら該当するとされていた）があると、アマチュア資格を失うシステムになっていた。

もつとも、このソープの一件には様々な裏事情があるらしい。最たるものは、アメリカ原住民出身であったソープへの人種偏見と言われている。抗議が行なわれるのはオリンピック閉会から三十日以内という規定を無視するかの如く、半年以上経てからのスクープに端を発する一連の抗議の動きが認められたという事実が、それを証しているかに思われる（その後一九八二年、IOCはソープの名誉を回復し、遺児に金メダルが渡された）。

歴代IOC会長の中では、第二次大戦後、二十年間にわたり職（第五代）にあったアベリー・ブランデージも、強いアマチュアリズム信奉者だった。冬季五輪では、スキーヤーたちが使用製品の広告塔となることを嫌った。ブランデージ会長下での最後の冬季五輪は一九七二年の札幌大会だったが、今のように契約している会社のスキー板をブランド名が分かるように掲げて表彰台に立つ姿は、なかったように記憶する。

ブランデーは一九一〇年前後に活躍したアメリカの混成競技者であり、ソープが制した一九一二年の大会では五種競技で入賞を果たしていた。ソープのスキヤンダルを同時代アスリートとして目の当たりにしていたことになる。彼のアマチュアリズムへの強い思い入れには、ソープの一件が作用していたのかもしれない。クーベルタンやブランデーといった先人が強い個性を歴史の上で今なお燦然と放っているためか、アマチュアリズムを死守してオリンピックの神聖を保てという主張が時に見られるものの、一八九六年に始まる近代オリンピックの歴史を顧みると、参加資格に関わるプロ／アマという区分についてさほど厳格でない時代の方が長かったことが分かる。そして、この区分が今後ますます問われなくなるであろうことは、まず間違いないだろう。

アマチュア規定廃止の恩恵に与ったカール・ルイス

ブランデーは一九七二年のミュンヘン大会ののち会長職を退き、第六代会長にはアイルランドのキラニン卿が就いた。キラニン会長治世下で特筆すべきは、一九七四年、オリンピック憲章からアマチュア規定が削除されたことである。キラニン卿は、一九八〇年のモスクワ大会直前に会長職を辞した。そのモスクワ大会は、前年の旧ソビエト連邦によるアフガニスタン軍事介入に抗議して、日本を含む西側諸国が不参加（西陣営ではイギリスは参加）を決定し、盛り上がりを欠く大会となった。オリンピックというスポーツの祭典に政治が持ち込まれたのである。

続く一九八四年の、五十二年ぶり二度目のロサンゼルスで開催となった五輪は、スーパースターの誕生を見ることとなった。陸上競技一〇〇m、二〇〇m、走幅跳、そして四〇〇mリレーで金メダルを得た米国

のカール・ルイスである。この四種目を制したのは、一九三六年のナチ主催といつていいベルリン大会で活躍した同国のジェシー・オーエンス以来であり、歴史に残る快挙となった。ルイスはその後、ソウル、バルセロナ、そしてアトランタと走幅跳で四連覇を果たす。こちらは、同国の円盤投手アル・オーター（メルボルン、ローマ、東京、メキシコをいずれも五輪新記録で制覇）に肩を並べる偉業となった。

もし米国がモスクワ五輪に参加していたなら、ルイスはモスクワからの五連覇を果たしていたのでは？と思う向きもある。たしかに、ルイスはモスクワ大会の出場権を得るための国内選考会を通じてはいた。追い風参考で八m三〇をこえる跳躍を見せたこともあった。だが実際はまだ八m前後の実力のジャンパーであり、仮にモスクワ大会のピットに立っていたとしても、反り跳びスタイルで八m五〇を超える大きな跳躍を見せた東ドイツのドンブロウスキーを凌駕することはかなわなかったと思われる。

オリンピック憲章からアマチュア規定が削除された直後の時代のトップアスリートとなったルイスの競技者としての日々は、走れば、跳べば、それが莫大な収入に直結するというモデルケースともなった。契約しているスポンサー料、競技会への出場ギャランティー、それにCMへの出演料により巨額の富を手にした。今日のウサイン・ボルトの原点をルイスに見ることは可能だろう。陸上競技者に限定するならば、アマチュア規定の削除の「恩恵」に真っ先に与ったのは、カール・ルイスではないか、と思われる。

生まれてくるのが早かったか——メキシコ五輪のスーパーアスリートたち

見方を転じるならば、アマチュア規定廃止の一九七〇年代前半よりも前に全盛期を迎えていたアスリートたちには、この「恩恵」はなかったということである。ここでは、一九六八年のメキシコ大会で大記録を出

したアスリートたちに思いを馳せてみたい。オリンピックで初めて一〇秒の壁を破る九秒九五で一〇〇mを制したジム・ハインズ、初めて四〇〇m走を、一〇〇m平均に換算して一〇秒台となる四三秒八六で駆け抜けたリー・エヴァンス、世界記録を一気に五〇センチ以上更新し八m九〇の夢の大記録を打ち立てた走幅跳のボブ・ビーモン、といったスーパースリートを生んだオリンピッククとして、メキシコ大会は五輪史に名を残している（もつとも、競技場が標高二〇〇〇mをこえる高地ゆえ空気抵抗が少なかったから、という側面も多分にあったのだが）。

陸上競技にはプロ団体がなかった以上、瞬発力を要する種目で功成り名遂げたアスリートたちには、プロ団体が存在する別種のスポーツが待っていた。ほとんどの場合、それはアメリカンフットボールだった。一九六四年の東京五輪の一〇〇mを制したボブ・ヘイズはNFLで名を残すプレーヤーとなったが、ヘイズはまれな例外で、一芸に秀でて他芸にまで秀でるのは難事だった。メキシコ五輪で月桂冠の榮譽に浴した前記アスリートのうち、陸上競技を続けたのはエヴァンスのみで、ハインズはNFLへ、ビーモンは、おそらくジャンプ力を見込まれたのであろう、NBAの世界へそれぞれ誘われて入っていったものの、大成することなくやがて去ることとなった。

メキシコ大会当時二十一歳だったリー・エヴァンスは、一九七二年のミュンヘン大会での連覇を夢見たことであろう。だが陸上大国アメリカの選手層は厚い。ミュンヘンへ向けての国内代表選考会で四着に終わり出場権を逃した（五輪に出場できるのは選考会で各種目二着まで、という一発勝負なのがアメリカ流である）。加えて、エントリーしていた一六〇〇mリレーでは、四〇〇mで金銀を得たチームメイトの二人が表彰台で五輪への敬意を欠いた行為をとったとして永久追放処分を受け、もう一人の代表は決勝レースまで順当に進

んだものの大腿後部を痛め途中で棄権、こうして米国は四名のメンバーを揃えることはかなわなくなった。世界記録保持者でありながら、そして遠路ミュンヘンまで出向きながら、エヴァンスには五輪のトラックをふたたび走る機会とは与えられなかった。

エヴァンス以外にも悔しい思いをした同国のアスリートがいた。メキシコ五輪棒高跳ゴールドメダリストのボブ・シーグレンである。ミュンヘン大会直前になって使用している新ポールが五輪では禁止と決定し、不利な条件で競技に臨まざるを得なくなり、東独のノルドウィックの後塵を浴び、銀メダルに終わった。個人としての連覇を果たせなかったばかりか、第一回のアテネ大会以来続いていた米国のこの種目での連勝を十六で止めることとなる、不名誉の責をも負うこととなった。

エヴァンスも、シーグレンも、失意のうちに帰国したのであろう。そういう彼らを待っていたのは、新しく結成されたプロ陸上団体からの誘いだっただけ。バスケットボール、ベースボール、フットボール、それにアイスホッケーというように米国ではプロ競技団体があっただけでもない。陸上競技にもプロ団体を設立しようという動きが、一九六〇年代後半にはあった。そして一九七二年のミュンヘン大会直後、International Athletic Association (IATA) の団体名を掲げて活動を開始した。中心となったのは、バスケットボールやアイスホッケーの既存プロ団体に対抗する新団体を設立して名を挙げた経歴をもつプロモーターの、マイケル・オハラという人物だった。エヴァンスもシーグレンも創設メンバーとして加入した。ミュンヘンで八〇〇mを制したデイヴィッド・ウォットルものちに加わった。すぐれた経営手腕をもつオハラは、所属アスリートには定期給のほか記録に応じた臨時給も支給、TVコマースシャルなどへの出演も自由とした。試合については、全米をツアーで回る形式を採った。当時アメリカでアマチュア競技を統率するの

はアメリカ体育協会（AAU）であり、オハラはITAの活動がAAUの競技日程と重ならないようにするなど配慮して、ITAの運営に腐心したという。

本格的なプロ陸上団体の試みであったITAは、一九七六年のモントリオールオリンピックのち、活動を終える。テレビ放映権を売っての収入が見込めなかったこと、新たなスター選手の獲得がかなわなかったこと、が「失敗」の原因と世上言われている。このITAに集ったメキシコやミュンヘンのヒーローたちは、一九七四年の五輪憲章のアマチュア規定の撤廃、その後のカール・ルイスたちの活躍ぶり——走れば走るほど裕福になる——を目の当たりにしてどう思ったであろうか。生まれてくるのが早かった、と慨嘆したアスリートもきつといたものと思われる。

獲得メダル数は成否の指標のすべてか

ここまでアマチュアリズムを手がかりにして、五輪史の概略を追ってみた。以下、四年後の東京大会を見すえての所感をいくつか記すこととしたい。

リオ五輪での日本選手の獲得メダル数は、金十二、銀八、銅二十一、の総計四十一個となり初参加以来最多となったと報じられた。次期大会のホスト国としては、メダル獲得総数の伸びは慶賀すべきこと、頼もしく思える成果なのは間違いない。数値は評価を行なうさいの重要な、そして簡便な指標となりうる。自分の、わが子の、あるいは教え子の各種受験を前にして、偏差値という数値に一喜一憂した経験をもつ方も多いことと思う。

学習習熟度を測る物差しが偏差値だけでないように、ものには数値では把握できない面もあるのだが、ついつい分かりやすい指標に眼を向けやすいのが人の世の常であろう。オリンピックについていうならば、獲得メダル数が増したと言って成功を喜び、減ったから反省を促し、また数が減っても予想外のメダルを手にしたのだから全体として成功と考えてよい、という向きが強いように思えるが、かかる単純な対応ではオリンピックという事象を捉えきれないだろう。

同じくリオの地で開催されたパラリンピックが、はからずもそのことを考えさせる契機となったように思う。日本選手団は、前回獲得した金メダル数五をこえる十個、そして銀、銅合わせ総計四十個を目標としていたとのことだが、終わってみれば銀十、銅十四を獲得し、総計二十四個となり前回大会で得た総数十六を凌駕したものの、金メダルには一つとして届かずに終わった。金の獲得数ゼロというのは初参加した一九六四年の東京大会以来初めてという。数値のみを評価指標とすれば、金メダル獲得数がゼロというのは不振の象徴、ということにもなる。

しかしながら、この結果は、日本のパラリンピアンたちの技量が劣化したからではなく、競い合う他国の選手層が厚くなり、かつ競技レベルが向上したことに起因する相対的不振だったことは、既に新聞等で報じられていると通じられる。自己記録（昨今では、プライベート・ベストPBと呼ぶらしい）を更新しながらも、狙っていたメダルを手になかったアスリートもいたことがその証左となる。予想外の結果を目の当たりにして、パラリンピック事業へ国がもつと助成することが必要という議論が生まれたのは自然な流れだった（隣国中国のパラリンピックへの国家としての取り組みも、わが国のジャーナリズムで報じられることとなったが、その体系立ったシステムには一驚せざるを得なかった）。

終わりなければすてよし、ではない

一方オリンピックでは、逆のケースを考えさせることにもなった。こちらはより深刻と思われる。すなわち、ある種目で思いがけないメダルを手にしたため、同競技の他種目での不振を猛省しなければいけないにもかかわらず、反省を途中で放棄してしまったかのような雰囲気が生じた事例である。閉会式も間近となった陸上競技の最終盤で行なわれた男子四〇〇mリレーの銀メダル獲得の快挙は、それまでの陸上各種目で予選落ちがほとんどだったことへの憂いを吹き飛ばすかのように作用した。持ち記録は誰も十秒を切っていないかつたスプリンター四名から成る日本チームが、九秒台スプリンターを揃えた陸上大国アメリカに先んじてゴールへ飛び込んだのである（アメリカはのちにバトンパスミスで失格と判定され、カナダが三位に繰り上がった）。

オリンピックの陸上競技の最終種目は男子マラソンであり、その前に男女の四〇〇mリレー、そして一六〇〇mリレーが行なわれるのが慣例となっている。そのリレーで銀メダルを手にしたため、さながら「終わりなければすてよし」の如き雰囲気が生じ、偉業をなし得たシルバーメダリスト四名を讃える記事が紙面を大きく飾り、テレビの報道番組もこの快挙でしばらく持ちきりとなった。

リレーでの銀メダル獲得の快挙は、日本の陸上競技史、オリンピック史に残る偉業となるに相違ないが、これで陸上他種目の不振が相殺されるものでもとよらない。男女のマラソンを中継する映像では、日本選手の勇姿どころか途中からは苦しい表情を写すのほとんど終始し、日本はメダルからますます遠ざかっているという冷徹な現状を観る者に突きつけたし、他種目でも自己記録に遠く及ばぬレコードにとどまった例が多数見られた。男子リレーの美談で終えてしまっている話では毛頭ない。

陸上競技連盟に直言した陸上専門誌

さすがに、陸上関係者の緊張感は違った。専門誌はオリンピック特集号で、忌憚なく分析し、憂え、そして訴えた。

自己記録を更新したのは、男子一〇〇mの山縣（亮太）と男子四×一〇〇mリレー、男子四〇〇mハドルの野澤啓佑の三例だけで、女子は皆無だった。前回は男子二例、女子三例の計五例もあったから、それに及ばなかった。一步譲って、今季自己最高の数だが、ここでも自己新を更新した上記の三例に加え・（中略）・の六例にとどまった。前回は一二例もあったから、今回は話にもならない。これでは国際大会で記録を上げて来る他国に対抗できない。

今回のリオは前回のロンドンより劣っている、後退しているということに尽きる。男子四×一〇〇mリレーの成功に酔っている暇はない。次の東京まであと四年しかない・（中略）・と次々に国際大会が迫り、あつという間に二〇年を迎えてしまう。

『月刊 陸上競技』二〇一六年一〇月号

リオ五輪に日本は五十名を超える大選手団を派遣した。オリンピックという四年に一度の世界の舞台で戦う好機を与えられたアスリートたちの戦績は、自己記録更新は三例、今季最高としても六例にとどまるという。記録を争う競技は、その成否が素人にも直ちに分かる。入賞できなくとも、自己記録更新を果たしたな

ら代表の責務を少しは果たせたとして労いたい気は起ころのだが、この結果では代表の名が泣こう。百四年前、初めて日本がオリンピックに参加したさい、選ばれた初の代表選手たち——といっても、スプリンターと長距離選手のわずかに二名だったが——は、北欧の地への渡航費用を自弁した。物心両面で相当な覚悟での参加だった。それに比すれば、費用はすべて公費でまかなわれる平成の世の若者たちは、明治末年の大先達の覚悟への思いはあったのか、と問い質したくさえる。

陸連はもちろん派遣標準記録を設定し、記録突破者のなかから厳正に選手を選考しているのだが、少しでも多くの競技者に世界の大舞台を直接経験させたい、という気持ちが一義と感じられ、他国の選手と競い、勝てる選手を派遣するということは二の次になっている観を否めない。別の陸上競技専門誌は、編集長の署名入りで『「世界で戦う」定義を明確にし 強い代表チーム編成を』という記事を掲げ、以下のようにこの問題を問うている。

世界で戦うことが目的だったのか、それとも一人でも多くの選手を送り込むことが目的だったのか。リオ五輪の日本代表を見ていてあらためて感じたのは、チームの方向性の曖昧さだった。(中略)・種目数が多いとはいえ、全競技最多の五二名もの派遣選手に対して「メダル二、入賞二」が少なく見えてしまうのは、正直なところだろう。(中略)・男子四×一〇〇mRや男子五〇kmWのメダル獲得という快挙で陸上のインパクトを残した一方で、これだけ予選落ちや完敗という結果を出したチーム編成では、全体として成功とは言い難い。

〔陸上競技マガジン〕二〇一六年一〇月号

言葉を選んで記してはいるが、陸連の方針への強い疑義を感じさせる文章である。『陸上競技マガジン』誌は、昭和五十年代半ばより日本陸上競技連盟の「陸連時報」を毎月巻末に載せ、陸連の機関誌としても機能してきている。同誌の編集部という「身内」から出された厳しい意見に陸連幹部たちがどう向き合い、四年後の五輪開催に向けて進むのか、陸上関係者ならずとも注目したいところである。

スポーツを語るむずかしさ

メダル獲得数が目指すすべてではないなら、一体何を目標に掲げればいいのか。それは、よりよきパフォーマンスに尽きよう。レコードを競い合う陸上競技や水泳のような競技は、同じ競技会の出場者ばかりか古今東西の先達ともパフォーマンスを比較できる。さきに記した米国でのITAという試みが失敗に終わったのは、ツアーが連続し凡記録が続く、そのパフォーマンスに魅力を感じなくなった観客の足が遠のいたためではないか、と私は推察している。ITAは設立翌年の一九七四年春のシーズンに来日し、前年オールウェザー競技場へと改装成った国立競技場を駆け抜けた。だが、特集を組んだ『陸上競技マガジン』が、「豪華メンバーが勢ぞろい——しかし内容は」という記事を載せざるを得なかったように、メダリストたちとは思えないような凡記録を残して去っていった。二度目の来日はなかった。

一方、日本中に感動を呼び起こした男女の卓球のように、パフォーマンスを数値化して把握することができない競技もある。しかし、競技に臨んでいるアスリートたちの真剣さ、そこから生み出される競技レベルの高さは、素人観客にも伝わってくる。どの競技種目であっても、パフォーマンスレベルの高い競技を観た

いと切に願うのが常ではないか。そしてそのさい、アスリートたちのパフォーマンスの良し悪しを、観る者に分かりやすく伝えてくれる、よき解説者の存在も不可欠だと思う。

だがスポーツを語ることは難しい。それは、音楽や美術を評論の対象とするのと同じくらいの難事だと思う。そのためか、それぞれのスポーツには「業界語」めいたものが跋扈している。たとえば大相撲の世界には「立ち合いのきびしさ」がある。不振の力士を前に何が必要か、と訊かれて「立ち合いのきびしさはまだ足りない」ふうな回答を口にする解説者が少なくないが、「立ち合いのきびしさ」とはそもそもどういうことを指すのかを示さずに、二言目には「立ち合いのきびしさが足りない」と言い放つてみても、解説者の責を果たしてはいないだろう。「立ち合いのきびしさ」ばかりを指摘する元横綱の部屋持ち親方の解説より、現役時代はたとえ平幕止まりであっても解説者席ではバイオメカニクスふうな語りを展開してくれる若手親方の語りのほうが、聴いていて学ぶことが多々ある。

ちなみに右に記した卓球では、解説者の語り口が大変好評を博した。女子卓球の解説の多くは、ロンドン大会時に男子監督を務めた宮崎義仁が担当した。福原愛がエッジボールで敗退するという惜しい場面を前にした宮崎は、「私も選手を応援しているし、日本の卓球を応援しているから、あれはアウトだと思いたい。しかし自分の経験上、あの角度で当たって、少しでもボールの角度が変わるのなら、あれは入っているという判定で認めざるをえないと思います」と解説したという。プロの名に値する技術分析と自国選手への暖かいまなざしとが交錯する名解説が、ここにある。昨今はやりの表現を用いて、「神解説」との形容もなされているのも宜なるかな、である。

おわりに——よきパフォーマンスにはよき解説を

リオデジャネイロオリンピックをテレビで観戦していて、もの足らない解説はパフォーマンスの良し悪しを数値で捉えることが可能な競技種目に目立つように思えた。陸上競技では、短距離に二人、ハードルに一人、中距離以上の走種目に一人、跳躍と混成競技に一人、投擲に一人、そして女子の中距離以上の種目に一人、を配する解説者の布陣をとっていたが、このうち、跳躍・混成競技を担当した解説者のプロとは言い難い解説には失望した。現役時代棒高跳の日本選手権者でもあるこの国立大専任講師は、四年前のロンドン大会の折にも、「三段跳で一番大事なことは何でしょうか？」と実況担当のアナウンサーに訊かれて「助走のスピードです」と応じ、聞いていて驚いた。跳躍競技で助走のスピードが重要なのは当たり前なのにもかかわらず、である。三つの跳躍を通し助走スピードを極力落とさないようにするため、ホップの踏みきり時に高く上から低く遠くへ跳ぶことこそ三段跳の要、この解説者は、三段跳の競技経験はもとより指導経験もないのだろうかを感じたことを思い出した。

そのロンドン大会のときには、走幅跳と三段跳とで二つのメダルを得た米国人ジャンパーの出現を、五輪史上初の快挙としてアナウンサーともども讃えていたが、田島直人という大先達を知らないことにも驚いた。田島の偉業（ベルリン大会、走幅跳銅、三段跳金）は、日本陸上競技史の常識ではないか。リオ大会では、二回ファールが続いた競技者が、三回目の試技で踏み切り板のかなり手前からの跳躍となり自己記録に遠く及ばない結果に終わったとき、「そうですねー、二回ファールして緊張してしまったせいだと思いますよ」と口にしてた。自らの専門である棒高跳については、さすがに経験に基づく解説を時折展開してはいたものの、総じて技術解説ではなく、大雑把な心理解説に終始しているという印象を受けた。

女子の中距離以上を受け持った唯一の女性解説者は、知名度ではおそらく一番の増田明美だったが、競技者の育った家庭背景の紹介などを相変わらず熱心にする姿は、芸能レポーターを想起させた。また、自身がマラソン出身だったこともあってか、熱を込めて後輩ランナーを応援するのはよいのだが、「このコースは日本選手向けです」とか「今日の天気は日本選手にとっても向いています」と断言しつつ、好結果がこれまでも一つも出ないままで実況を終えている。反省はないのか。

ほかに適任の女性解説者がいないのかと思いたくなるがそうではなく、八月下旬に放映された全日本中学陸上選手権で全種目の解説を担当した、走幅跳の日本記録保持者で北京五輪出場の経歴を持つ井村久美子の解説は、技術解説がたいへん分かりやすく、陸上初心者の中学生であっても聴けば益するところ大、と思わせた。井村女史の解説に納得しながら、なぜNHKはこういう優れた解説者を五輪の場で使おうとしないのだろうか、と率直に思った。

陸上競技の解説者として群を抜くのは、今回も投擲解説を担当した小山裕三教授であろう。玄人受けのするマニアックな解説、としてウェブ上で紹介されることが多い。現役時代、砲丸投を中心とする投擲種目にとどまらず混成競技でも優れた記録を残した元アスリートだけあって、投擲種目以外に言い及ぶさいにも分かりやすい言葉を用いながら、聞く者を納得させる技術解説を展開する。ロンドン五輪時の中継では、投擲種目に加え混成競技をも担当しており、その解説を堪能することができた。

今回は円盤投の解説時に、「上手く飛ぶときは、上昇していくとき円盤は右側が下に、そして落下していくときには左側が下になるんですねー」と気持ちを込めて話していた。この語りに運よく接することができた視聴者は、円盤投をどう見ればよいのか、観戦の要を会得できたのではないか。また、砲丸投の決勝のの

ちには、入賞者のうち回転投法をとる選手が五輪史上初めてメダルを独占し、従来のグラインド投法者は少数派になったと指摘するなど、技術だけでなく競技史の視点からの解説をも展開していたことも注目された。

四年後の東京オリンピックでは、解説者のパフォーマンスも向上していることを切に願いたい。アスリートたちのよりよきパフォーマンスを、よりよき解説で堪能したい、と思う。

現在のオリンピックは、この小論で紹介したこと以外にも、いくつもの争点を提起している。本年大きな話題・問題となったドーピング、好記録を連発する女性アスリートを前にして、女性と男性との境界とは、という広義のジェンダー問題、そして義足などの用具の改良が劇的に進行する今日、オリンピックとパラリンピアンはどう共存するのがいいのか、等々である。いずれも大きな課題であり、稿を改めて論じることとしたいと考えている。